

《論説》

# アフリカ研究の今日的意義を考える

細 見 眞 也

## 目 次

はじめに：私の問題意識

1. アフリカ研究者が設定する研究目的
  - (1) A氏の論文から読み取る
  - (2) B氏、C氏、およびD氏の論文から読み取る
  - (3) 本節のまとめ
  
2. アフリカ研究者の言語観
  - (1) E氏の論文から読み取る
  - (2) F氏の論文から読み取る
  - (3) G氏の論文から読み取る
  - (4) H氏の論文から読み取る
  - (5) I氏の論文から読み取る

むすびにかえて

引用文献リスト

## はじめに：私の問題意識

私は、調査研究のため留学したガーナにおいて、日本では想像することもできなかったさまざまな失敗や錯誤を経験しました<sup>(註1)</sup>。そのなかで私にとって最も深刻だったのは、農村調査のために訪れたコブリソ村で村長代理をつとめていたコフィ氏から「何のために、そのような内容の調査をするつもりなのですか、調査の目的を村人たちにも説明して下さい」と尋ねられたことです。その質問に答えようとしたとき、自分には論文を書くのに必要なデータを収集するという目的しか思い浮かばず、学問的と言えるような目的が無いことにはじめて気づいたのです。それは、私とその目的を知らないまま調査しようとしている自分に気づき、情けない自分を文字どおり痛恨の想いで意識させられたことでもあります。

私にとって、これほど恥ずかしくて深刻な経験はないと言っても、決して大げさではありません。

この「苦い」経験をひとつの契機として、そのご今日まで私は、いったい何が原因で、そのよ

うに「お粗末で情けない自分ができあがったのか」という問題の根源を追究してまいりましたが、その過程で次のような暫定的な結論に到達しました。

すなわち、私たちがアフリカを調査したり研究する目的のひとつは、私たちが無意識のうちに身につけ、その言動の前提となっている自分自身の文化あるいは価値判断の尺度というべき「ものの見方」とか「ものの考え方」が何なのかを改めて自覚し、その是非を問うことにあるのではないか、ということです。

言うまでもなく、私たちは自分にとってそれが「正しい」とか「価値のある重要なことだ」と判断できるからこそ、行動するわけですが、判断したり決断するためには何らかの基準や尺度がなければなりません。そして、私たちは、小さいものでは家族と呼ばれる集団から、大きいものでは地域社会とか国家などと呼ばれる集団に所属しており、自分が所属する集団の中で常識と見なされてきた「行動の仕方」または「行動の様式」に従って行動するのが普通です。つまり、私たちは、自分が所属する集団の中で常識とみられている行動の「仕方」とか「様式」に従うことが正しいと信じて、それを真似してきただけであり、「真似ること」や「従うこと」がなぜ正しいと言えるのか、その根拠や理由を考えたり、その是非を自分で判断しているのではないのです。

これは、あくまで私自身の経験にもとづく推測にすぎませんが、私がモーリタニアの遊牧民に招かれて食事を共にしたとき「なぜ、食事の席に女性や子供が同席していないのですか」という私の質問に対して、彼らは「そうすることが長年の習慣だから、それに従っているだけであって、なぜ、そうしなければならないのか、その理由までは私たちにも分かりません」というように答えざるを得なかったのです。

この事例から明らかのように、私たちが常識に従っているかぎり、私たちは自分が「なぜ、そのような行動をとるのか」自分自身の言動の理由や目的を自覚したり、納得しているのではないのです。それは、先に述べたように、自分の所属する集団で大多数の人々が受け継いできた習慣としての行動の形式や様式を「ほとんど、そのまま踏襲する」のが常識に従う言動だということを考えれば、集団を構成するメンバーの大多数が常識の目的や根拠を自覚したり意識することができず、それに納得したうえで常識に従っているのではないことは、容易に理解することができます。

そこで次に問題になるのは、どうすれば常識の目的や根拠を自覚したり意識することができるのか、ということです。なぜ、これが私たちアフリカ研究者にとって問題なのかといえば、先に取りあげたモーリタニアの遊牧民の事例が示しているように、アフリカをはじめとして世界各地には私たち日本人の常識から見れば「常識はずれ」であったり非常識だと思えないような習慣とか行動様式が少なくありませんが、それは、人間社会であれば、そのすべてに通用する常識が存在しないことを意味している、と考えることもできます。仮に、この考えが間違いでないとしますと、私たちアフリカ研究者の目指している調査研究の目的が人間社会に普遍的な真理を究明することであるかぎり、目的の普遍性、つまり人間であれば世界の誰でもが理解し納得することができる目的を備えていなければならないはずで、ところが、私のガーナにおける「苦い」経験がものがたっているように、調査研究の目的は「学術論文を書く」などというように、自分が学界で一流の研究者として認められたいとするような「個人的な栄達」の実現であり、少なくとも当時の私には、普遍的で学問的な目的はなかった、と言わざるを得ないのです。

この事実は、設立以来、ほぼ40年以上ものあいだ私が会員として所属してきた日本アフリカ学会という集団のメンバーのあいだでは、アフリカ研究の目的が何かを共通の課題としてとりあ

げ、それを学術大会のような公開の場で議論することによって、少なくとも会員のすべてがアフリカ研究の目的または意義を共有するのに必要な努力がおこなわれてこなかったのではないか、という疑問を私に感じさせるものでした。

これは、日本アフリカ学会に所属しているアフリカ研究者の多くが、すべてがそうだと断定することはできないにしても、それぞれ自分の常識に従って調査研究の目的を設定しており、その目的には普遍性が欠落するという学問としての決定的な欠陥をもっている可能性がきわめて高いことを予想させるのではないかと私には考えられるのです。

以上に述べましたような問題意識または疑問にもとづいて、私は、編者のひとりである赤阪賢教授から寄贈を受けた著書『アフリカ研究：人・ことば・文化』（世界思想社、1993年）を事例としてとりあげ、本書に寄稿しているアフリカ研究者の論文を検討することにより、私の疑問が正当なものと言えるのか否かを可能なかぎり客観的に確認してみたいと思います。

(注1) 詳しくは、次の拙稿を参照のこと。

「発展途上国の研究と人間観について」（北海学園大学『経済論集』第48巻第3・4号、2001年3月所収）

「アフリカ研究の原点をもとめて」（北海学園大学『学園論集』第115号、2003年3月所収）

## 1. アフリカ研究者が設定する研究目的

私たち人間が何らかの集団の中に生まれ育っていくものであり、この過程で集団を構成する人々が共有している常識を当然のこととして無意識のうちに身につけることを認めるかぎり、私もまた、それが「絶対に正しい」と言えるのか否かを意識できず、その根拠が何であるかを知らないまま自分の常識を振りかざす可能性が非常に強いと言わざるを得ません。

それは、本稿で私がこころみる検討作業が、たとえそれが無意識の産物であったにしても、私の独断と偏見にもとづく批判的検討になるのを避けることが非常に困難であることをものがたっています。そのため、私が特定のアフリカ研究者に対して個人攻撃を加えているかのような印象を読者諸賢に与える可能性を否定することができません。しかし、それは私の本意ではありませんから、そのような誤解を多少なりとも塞ぐため、本稿でとりあげる論文の筆者の実名を伏せて、アルファベットに代えたことを、あらかじめ断っておきたいと思います。

### (1) A氏の論文「アフリカ乾燥帯における人と自然」（本書、pp.2-17）から読み取る

この論文の冒頭で筆者A氏は「本稿では、狩猟採集、農耕、牧畜によって生活を営む諸民族の事例に基づきながら、アフリカにおける自然と人間の関係を明らかにし、とくに人々の乾燥環境への適応を描き出すことを目的とする」（本書、p.3）と、この論文の目的を述べています。

しかし、ここで筆者のいう「目的」とは、改めて指摘するまでもなく、この論文で筆者が述べている内容の要点ないし概要をあらかじめ説明したものであって、「人々の乾燥環境への適応を描くこと」が、なぜ学問的に重要であり学問的に価値のあることなのか、という意味での学問的な目的ではありません。

筆者であるA氏は、当然のことながら戯れにこの論文を書いたのではなく、「人々の乾燥環境への適応」を描くことが学問的にみて重要であり価値のある（つまり、このテーマで論文をとり

まとめるだけの努力をするに値する)ことだと判断したからこそこの論文を書いた、と言っても間違いはないでしょう。言い換えれば、このテーマの論文を書くことが学問的な価値があるというA氏の判断が前提となって、この論文ができあがったに違いないのです。

しかし、残念なことに、少なくとも私がこの論文を通読したかぎりでは、私の言う意味での前提とか学問的に重要だという価値判断の根拠は、どこにも明記されていないのです。その意味で、A氏がこのテーマで論文を執筆した根拠や理由は、言葉によって意識的に表現されておらず、いわば「暗黙の前提」であるかのようにしてこの論文のなかでは隠されている、と言ってもよいでしょう。

常識を共有している仲間同士のあいだでは、たとえば、私たち日本人が茶碗に盛られたご飯を箸で食べるのを見ていても、互いに「なぜ、箸で食べて手でつかんで食べないのだろう」と疑問に思ったり、その理由や根拠を尋ねることはありませんから、その理由を意識できない(つまり、知ることができない)だけでなく、それを説明する必要にせまられることもありません。このように、私たちが常識を共有する集団の中にいるかぎり、常識の理由や根拠を説明する必要を感じることがありませんから、当然のことながら、それは「言わずもがななこと」として文字どおり「暗黙の前提」または「暗黙の了解事項」であるかのようにして、その集団のメンバーの誰もがその理由や根拠を知らず意識しないまま文字どおり無意識のうち(つまり、知らず知らずのうち)に身につけてしまうのです。

そのように考えることができるのであれば、A氏は自分が所属する集団の常識に従って、この論文を書いたのであり、それが学問的にどのような意義や価値があるのかについては、ほとんど考えたこともないはずですから、当然、それ(つまり、自分が取りあげた「人々の乾燥環境への適応」というテーマで研究することが学問として意義や価値があること)が研究者である自分にとって必要不可欠な条件であることに気づいておらず、無意識であったと推測することができるのではないのでしょうか。

この推測が的はずれではないと仮定しますと、A氏が所属する集団のひとつである日本アフリカ学会には、その会員である研究者が学術大会のような公開の場において、アフリカ研究の学問的意義や価値が何であるか(つまり、アフリカ研究の学問的前提)について「議論しないこと」が当然の常識であるかのように見なされてきたため、会員のひとりであるA氏も他の会員たちと同じように、その学問的前提について議論したことがなく、その必要性を意識せず無意識であったのではないかと私には推測することができるのです。

言うまでもなく、これはあくまでも私の推測にすぎませんから、A氏の論文が収録されている本書(以下、本稿で「本書」という場合は、前出の赤阪賢・日野舜也・宮本正興編『アフリカ研究:人・ことば・文化』世界思想社、1993年を指す)に寄稿している他のアフリカ研究者がA氏の場合と同じような常識にもとづいて論文を書いたと言えるのか否かを検討してみたいと思います。

(2) B氏の論文「ミオンボ林の農耕民:その生態と社会構成」(本書, pp.18-30)

C氏の論文「アフリカ熱帯林の研究:その生態と利用の方法」(本書, pp.43-58)

D氏の論文「アフリカのことわざ」(本書, pp.60-70)から読み取る

B氏は論文の冒頭で「1971年に西タンザニアのトングウェの地をおとずれて以来、私のアフリカ研究はミオンボ林に住む農耕民の調査を主軸として展開してきたといつてよい。ミオンボ林

の中の踏み跡をたどり奥地の村むらをたずね歩く旅が、私のアフリカ調査の原点であり、その体験が、後の研究に大きな影響を与えつづけてきたように思う」(p.18)と述べたうえで、この「ミオンボ帯」は、「独特の農耕を生業の基礎とする多彩な民族文化をはぐくんできた。そのような民族文化のうち、私はこれまで西タンザニアに住むトングウェ、東北ザンビアに住むベンバを主対象に選び、研究を進めてきた」(p.19)と、これまでの研究対象がミオンボ林に住むトングウェとベンバという二つの民族の文化であったことを明示したのち、「最近、このような比較研究の視野にあらたな対象が加わった。短期間の予察を終えたばかりであるが、西南タンザニアに住むマテングである」(p.20)として、現在では研究対象がマテングを加えた3つの民族文化になったことを述べています。そのうえで、B氏は、「小論では、これらの三つの農耕社会をとりあげ、その生態と伝統的な社会編成の特性について概観してみたい」(p.20)というように、この論文の目的を述べています。

このようにB氏は、三つの農耕社会の生態と伝統的社会編成の特性について「概観すること」がこの論文の目的であると述べていますが、「特性」を取りあげて、それを広く読者に紹介することが、学問的に見て価値があると判断したはずであるにもかかわらず、そのように判断した根拠については、先に取りあげたA氏の場合と同じように、一言もふれていないのです。つまり、B氏が言う目的は、自分が概観した調査研究の成果を学術論文として「書く」という行為の目的にすぎず、その行為の前提となっている学問的な目的については、B氏の場合にも「言わずもがな」なことであり自明のことであるかのようにして何も説明されておらず、文字どおり暗黙の前提とされているのです。

それではC氏は、論文の学問的な目的を言葉でどのように説明しているのでしょうか。

結論的に言えば、C氏の場合、少なくとも私がこの論文を通読したかぎり、目的という言葉さえも見つけることはできませんでした。

すなわち、C氏は論文の「はじめに」のなかで、「熱帯多雨林のサバンナ化は、ただ単に植生景観の変化だけにとどまるものではなく、熱帯生態系の変化という重大な意味を含んでいる」(p.43)としたうえで、「私は、熱帯多雨林のサバンナ化のメカニズムを解明するために、1984年以来、ベルトア近郊のサバンナで、その成立環境を植物生態学的に調査し、サバンナの生態的環境とその森林復帰への可能性について報告した。そこで、次にそのようなサバンナに隣接する森林(熱帯半落葉樹林)の生態的特性を解明する必要がある。さらに、半落葉樹林の生態的認識をもとに、その保護およびその資源としての持続的利用の可能性も考えたい。そのためにも、原生状態で半落葉樹林に起こっている現象を詳細に知る必要がある」(p.44)というように、「半落葉樹林の生態的特性を解明すること」とか「原生状態で半落葉樹林に起こっている現象を詳細に知ること」などが「必要である」と強調しています。

ところが、この「必要である」という説明には主語が欠落していますから、誰にとって「必要だ」とC氏が要求しているのかが明確ではありません。しかし、私から見て「必要なこと」であり、この論文の筆者であるC氏自身に要求したいことは、「半落葉樹林の生態的特性を解明」したり「原生状態で半落葉樹林に起こっている現象を詳細に知ること」などが、学問的になぜ必要だとC氏が考えているのかという理由であり、学問的な判断の根拠を明示してもらいたい、ということなのです。

先に紹介した「はじめに」の文章を読めば明らかのように、C氏は自分自身の研究成果をふまえたうえで「解明することが必要である」と言っているのですから、自分の研究成果には「学問

的に見て、まだ不十分なところがある」と判断したうえで、半落葉樹林の生態的特性を解明する「必要がある」と判断したのではないのか、と言ってもよいのではないのでしょうか。

このように考えれば、この論文の筆者であるC氏には「学問的な必要性がある」と判断した根拠とか理由が必ず存在したことになります。しかも、その根拠や理由は、研究者であるC氏にとって文字どおり必要不可欠な学問的な根拠であり理由なわけですから、C氏がそれを知らないなど想像することさえ私にはできません。

しかし、C氏が先に見てきたA氏やB氏などと同じように、アフリカ研究の学問的な意義や価値などといった調査研究の大前提について、公開の場で「議論しない」ことが常識であるかのように習慣となっている集団に所属してきたとすれば、私たちは、常識に従ったという理由でC氏を批判したり非難することは、厳に慎まなければならないでしょう。なぜなら、私たち人間は例外なく誰でも、必ず何らかの集団のなかでしか生きていけないだけでなく、集団のメンバーとして生きるためには無意識のうちに、集団に固有の常識を身につけざるを得ないことを経験的な事実として否定することができないからです。

次にD氏の論文「アフリカのことわざ」では、研究の目的が意識されているか否か検討してみます。

D氏は、「はじめに：機能する芸術」のなかで、「これは芸術的表現一般について言えることであるが、アフリカでは、芸術のための芸術といったものは存在しない。芸術というのは必ず“機能的”なものだ。すなわち、常になんらかの社会的機能を狙っている。このことは、難しいことを言わずに、事例を見ればすぐわかる。ただし、注意すべきは、アフリカでは、われわれの想像もつかないようなところに、ことわざがしばしば現れてくるということだ。したがって、ことわざの研究は、単にことわざの内容だけでなく、その民族誌的コンテクストにも十分注意を払うことが重要である。以下、アフリカにおけることわざの現れを、私自身が調査した、テンボ族、モンゴ族、レガ族の三つの事例を中心に見ていくことにする」(p.61)というように、この論文ではテンボ族などの3部族を事例として取りあげ、彼らの日常生活のなかで、ことわざがどのような機能を持っているのかを「見ていくこと」がこの論文を記述した目的である、と述べているように見えます。

このような私の理解が的はずれではないとしますと、前記三つの部族社会において観察されることわざの社会的な機能が何であるかを読者に「紹介する」ことを目的にして、D氏は、この論文を書いたと言い換えることができるのではないかと私には考えられます。

そこで、私には次のような疑問が出てくるのです。それは、この論文が日本人の読者を想定して書かれたものであるとすれば、アフリカの社会で使われていることわざの社会的機能を私たち日本人に紹介することが「何らかの意味において重要だ」と筆者であるD氏が判断されたからこそ、この論文を書かれたというように解釈することができますから、筆者が重要だと判断した根拠または理由が何であったのか、という疑問です。さらに、この疑問に付け加えなければならないことは、この論文において筆者がただ単に「アフリカのことわざを日本人読者に紹介する」というだけでなく、きわめて多数の部族(民族とかエスニック・グループと言ってもよい)がアフリカ大陸には存在すると見られるにもかかわらず、なぜ、テンボ族、モンゴ族、レガ族という三つの部族のことわざを筆者が選んで、それを「アフリカのことわざ」として紹介しようとしているのか、という疑問です。

この疑問は、これら三つの部族とか民族の社会が「アフリカを代表している」あるいは「アフ

リカに典型的な社会である」という判断が前提となっていなければ、この論文の「アフリカのことわざ」というテーマは、厳密な意味では、羊頭狗肉になってしまうのではないかと、という疑問からでたものです。

言い換えれば、筆者であるD氏は、この論文のテーマを率直に受け取れば（つまり、私が筆者に対して皮肉を言うつもりがなければ）、これら三つの部族社会がアフリカ的な特徴を備えていると判断したからこそ、「アフリカのことわざ」というテーマをつけて、この論文を書かれたのに違いないと私には考えられるのです。

そこで、改めてこの論文を読み直したところ、「終わりに：ことわざによる文化の伝承」と題した本文の最後に、次のような記述があることに気づきました。

それは「それでは、なぜ彼らは“英知”をことわざに託すのだろうか。それは、私見によれば、彼らが無文字社会に生きているということと大いに関係している。すなわち、文化というものは、その性質上、伝承されなければならないのであるが、ある内容を口頭で伝承する際—つまり、無文字社会において—、ただ漫然と口移して伝えるよりも、そこになんらかの形式を導入し、それをチャンネルとした方がより満足な結果を期待することができる。無文字社会においては、口承文芸 (Oral Literature) というものは、多かれ少なかれ、そのためにあるのだが、そのさまざまなジャンルの中でも、とりわけことわざは、その形式の簡潔性のゆえに最も適した表現形式となっているのである」(pp.68-69) という文章です。

例外は認めなければなりません、筆者が指摘するように、無文字であることがアフリカの部族または民族社会に共通する特徴の一つであることは、ほぼ間違いないと思いますから、筆者が無文字社会と関連させながら「ことわざ」を考察しているのは、この論文のテーマから見ても当然のことだと思えます。

しかし、筆者が使っている文化という抽象的な概念または言葉を取りあげても明らかなように、私たち人間が使う言葉には大なり小なりの抽象性という特徴があり、その結果、言葉には多様な解釈が加えられる余地があり、誤解や曲解が起こるのを避けることが難しいという言葉に対する見方とか考え方、すなわち、中野好夫氏の表現を借りれば「言葉は不完全な道具である」という言語観が筆者には欠けているのではないかと、私には考えられるのです<sup>(註1)</sup>。

なぜ、そのように言えるのかと言えば、先に引用した文章の中で筆者D氏は「文化というものは、その特質上、伝承されなければならない」と言っていますが、ここで言う「伝承されなければならない」という表現を「人間が意識的に伝えなければならない」という意味にも解釈できるとしますと、人間は「自分の文化を意識することができる」こと、つまり、私たちは自分の文化が何であるかを目で見るとして「意識したり、知る」ことができる習慣的な形式や様式だ、とD氏が考えていることになります。

言うまでもなく、文化人類学者のあいだでも何をもって文化と定義するかが必ずしも一致しておらず、さまざまな定義があるとされていますから、D氏と私の定義が異なっていたとしても不思議ではありません<sup>(註2)</sup>。

そこで、いま仮に、ある社会で長年の習慣として受け継がれてきた食事の仕方という行動の形式や様式が文化であるとしますと、形式や様式を目で見るとしては簡単ですから、比較的容易に形式や様式を真似ることができるという意味で、私たち人間にとって文化を「意識的に」伝承することは可能であり、それほど困難ではないと言えるでしょう。

しかし、「なぜ、そのような習慣を続けているのですか」という私の質問に対して「なぜなの

か、その理由は私たちにも分かりませんが、長年の習慣だから続けてきたのです」とモーリタニアの遊牧民が答えたことから明らかなように、その習慣に従うことが「なぜ、正しいと言えるのか」という理由や根拠を「意識する」こともなく、文字どおり「無意識のうち」に受け継ぐのが文化の継承だとしますと、クラックホーンなどが指摘しているように、私たちすべての人間は誰もが、所属する集団や社会に固有の文化を身につけているにもかかわらず、自分がどのような文化を身につけているのかを「意識すること」ができず、自分自身がどのような「ものの考え方」とか価値判断の基準（つまり、価値観）を身につけているのかを知らず、自分がどのような人間なのかについて「完全に無知である」という事実を認めなければなりません<sup>(註3)</sup>。

したがって、文化は、この論文の筆者であるD氏が言うように、「伝承しなければならない」などというように明確な理由や根拠にもとづいて、人間が意識的に伝承してきたものではなく、それに従わなければならない理由や根拠を知らず、それに納得することも出来ないまま、無意識のうちに、そうするのが当然の常識であるかのように「思い込んで」継承してきたのではないのでしょうか。

その証拠に、私たち日本人の多くは言葉に文字があるのが当然であり、そのような社会を常識と思い込んできましたから、文字のない無文字社会を想像することができないだけでなく、人間にとって「文字は、なぜ、何のために必要なのか」とか「文字は、いったい誰が何のために考案したのか」などというように、根底的な疑問を感じたり、考えたことさえないのが大半であり、当然のこととして文字を使うだけであって、文字には大きな「限界がある」ことをまったく知らないという場合が少なくないのではないかと、私には推測することができるのです。

### (3) 本節のまとめ

すでに拙論のなかでも述べてきましたように、私は、ほぼ40年前にガーナのコプリソ村で村長代理をつとめていたコフィ氏から「研究者である貴方の農村調査について、調査の目的が何であるかを村人たちに説明してもらいたい」と問われ、答えようとしたときはじめて、自分には学問的な目的がなく、あるとすれば論文を書くのに必要なデータを集めることしか無いのに気がつき、内心では非常に恥ずかしい思いをするという経験をしました。

私にとって「生涯の禍根」とも呼ぶべきこの経験によって、その後、現在に至るまで「なぜ、自分はそれほどまで粗末で情けない人間になっていたのか」という大きな疑問の回答を探し求めてきた、と言っても過言ではありません。

その答えを探し求める過程で、日本の文化、そのなかでも特にアフリカ研究者としての私に有形無形の影響を与えてきた存在だと考えられる日本アフリカ学会のあり方に疑問を感じるようになりました。

その疑問を一言でいえば、たとえば「アフリカ研究とは何を指すべきなのか」などというように、アフリカ研究者である私たち自身の存在理由を「根底的に問う」ような課題について、日本アフリカ学会の学術大会という公開の場で議論しようとしてこなかったのは、なぜなのか、という疑問なのです。

仮に議論してこなかったのが事実であるとしますと、個々のアフリカ研究者は、自分自身が「絶対正しい」と判断した目的にもとづいて調査研究を進める以外に方法はありませんが、その場合、個々の研究者は自分が身につけてきた「狭い」常識に従って判断することにならざるを得ません。なぜなら、アフリカ研究者と言っても、実際には人類学をはじめとして、地理学とか経

済学あるいは農学など、さまざまな専門分野に分かれており、それぞれの専門分野の内部では互いに「持ちつ持たれつの関係」に置かれていますから、互いに批判的な議論をすることは「村八分」のような制裁を受ける覚悟がなければできないのです。したがって、それぞれの専門分野の内部では、「批判的な議論をしない」という習慣が自然にできあがり、それが常識になってしまっているのではないのでしょうか。

これは、あくまでも私の経験にもとづいた考えでありますから、単なる想像の域をでません。そこで、日本のアフリカ研究者のあいだには、批判的な議論を「しない」という常識がある、と言えるのか否かを次節において検討したいと思います。

ここで指摘しましたように、事実として日本のアフリカ研究者が「批判的な議論をしない」という常識をもっているとしますと、自分が批判されるのも認めたくないと考えているとも言えます。それは、結局のところ、自分は絶対に正しいのだという考えになるわけですから、少なくとも私の経験からみれば、独善的で間違った危険な自己認識であり、人間は無意識のうちに誤りや間違いを犯す弱いもののだという普遍的な人間観ではないと思います。

(注1)「国民の統一意識とか、社会の協同観念とかの形成に、それほど言語が大きな役割を果たすといえ、それでは言語とはそんなに完全で重宝なものかという問題になるが、実はこれが大変な誤解。言語の買ひ取りくらい危険なものはない。言語とはおよそ不完全な道具なのである。結局どうだろうと大した変わらないようなことを通じ合っている限りでこそ、たしかに便利重宝にちがいないが、ひとたびギリギリ一杯の重大な事柄でも伝えようと言う場合になってみるがよい。いかに言語というものが不完全で、いらだたしいものか。手取り早く実験したいと思えば、試しに燃えるような恋愛か、生命がけの議論を一つしてみるがよい」(中野, 1979年, p.383)

(注2) 泉靖一教授は、その論文「文化の等質性と異質性」の冒頭で、たとえば『まぎらわしい言葉』という、ある新聞の連続コラムのなかで、未開人の風習や慣習を対象とする学問を、文化人類学とよぶのはおかしい…と書かれていたことを記憶している。この場合、おそらく人類学という言葉にはあまり疑問がさしはさまれず、形容詞として使われている『文化』が、まぎらわしい言葉として理解されたにちがいない。たしかに、日本語の文化という言葉の内容は種々雑多である。『文化住宅』『文化パン』『文化国家』『進歩的文化人』など、あまりはっきりしない『文化』が、日本人の頭脳のなかにもやもやと渦まいているようだ(泉, 1970年, p.7)と述べている。

ジョン・コンドンは、「たとえば、エドモンド・リーチは、文化を『コミュニケーションのシステム』と解釈し、エドワード・T・ホールは『文化とはコミュニケーション』であるといっている」(ジョン・コンドン, 1980年, p.15)と紹介して、文化概念の「まぎらわしさ」を示唆している。

エドワード・T・ホールには次のような発言がある。「文化ということばは、すでに多種多様な意味で用いられているので、ここでもう一つつけ加えたとしても、さして実害はないであろう。この書物の中で、私は文化ということばを定義しなおし、できればこのことばにまつわるあいまいさを明確にしたいものと考えている。人類学者にとって、文化とは一個の人間集団の生き方、すなわちかれらが身につけた行動の型や態度や、物質的なものの全体を意味してきた。この一般的な見方では一致しているが、文化の実体がなんであるかということについては、人類学者の意見は必ずしも一致していない」(E.T. ホール, 1989年, p.39)

(注3)「文化は、観察可能な慣習や人工物にのみ現われるわけではない。ある集団の成員全部に共通な基本的態度の中には、自意識が最も発達している文化で最も明晰な人物に尋ねるならまだしも、誰をいかに問いつめてみても出てくる見込みがないものがある。この種の基本的前提個条は全く当然のこととして考えられ、通常の状態では意識にのぼることがないからである」(C. クラックホーン, 1971年, p.39)

「しかしわれわれがかかえている問題の大部分は、われわれの無知に発している。各分野の第一線にいる真面目な人びとでも、文化がどれほど人間の行動に深い永続的な影響をあたえるものであるかを見逃している。しかも文化による決定的な影響のほとんどは、人間の意識の外にあり、個人がどれほど意識的に操作しようとしても、できない相談なのである」(E.T. ホール, 1989年, p.45)

## 2. アフリカ研究者の言語観

前節で私が想像と推測を交えて指摘したように、私たち日本のアフリカ研究者が「批判的な議論をしない」ことを常識であるかのように考えてきたとしますと、当然のことながら、私たちに「批判した」とか「批判された」という経験が欠けていることが想定されます。私たちは誰でも、自分が公開の場で批判されるような立場に置かれれば、全力を尽くして反論しようとする。ということは、相手が「全知全能」をもって自分の批判に対して反論してくることを覚悟しなければ、相手を批判することができない、と考え批判の厳しさと責任の重さを自覚することでもあります。

ここで私は、全知全能をもって反論すると言いましたが、相手に対して「的を射た」反論をするためには、相手が何を批判しているのかをできるかぎり正確に受け取り、相手の言葉に誤解や錯誤などがないか否かを注意深く考えたり判断することが「全知全能をもって反論する」という意味なのです。他方、批判する人間は、批判の対象である相手の言説を自分が誤解したり錯誤することによって相手に「スキ」を見せないようにできるかぎり正確に理解するよう言葉に対して最大の注意を払うことを意味します。

このように考えても間違いのないとしますと、批判的な議論がおこなわれる社会では、人々は言葉というものを(批判が肉体的な暴力ではなく言葉によっておこなわれるかぎり)注意深く用心しながら慎重に使わざるを得ません。したがって、そこでは言葉を安易に(不用意に)使わないという用心深さとか慎重さを人々が身につけていく、と言ってもよいでしょう。

言い換えれば、仮に私たち日本のアフリカ研究者のあいだに批判的な議論を「しない」のを常識であるかのように見る考えがあるとしますと、私たちアフリカ研究者が公表する研究成果(つまり、論文や著書など)のなかに、「言葉は安易に使っても大丈夫」であるかのように見る言語観が無意識のうちに現れ出ている可能性がある、と言えるのではないのでしょうか。

このように想定することができますから、ここでは、前節で取りあげたのと同じ本書(赤阪賢・日野舜也・宮本正興編の前掲書)に収録されている論文を事例にして、その筆者であるアフリカ研究者の言語観を読み取ることにしたいと思います。

### (1) E氏の論文「個人史から地域史へ：マリ南部の事例による」(本書, pp.140-156)から読み取る

この論文の冒頭には次のように注目すべき文章が書かれております。

「アフリカについて語られるとき、一般に『野生の王国』とか『部族対立』とかの固定的なイメージが定着しており、じゅうぶんな理解が薄いことに苛立ちをもつことがある。文化人類学の成果も文化の個別性を論じるに急のため、違和感が強調されるあまり、なにか別世界の出来事のように傍観することに力を貸してきたのではないか。今日、アフリカ研究の意義が問われるとき、伝統的な文化体系を抽出する作業に拘泥してられない。むしろアフリカ社会にも地域ごとに特

有の展開をもっているものであり、アフリカの人びともわれわれと同時代を生きているという認識から出発し、そのことを確認する作業が必要だろう」(pp.140-141)

この論文の筆者であるE氏は「アフリカ研究の意義が問われるとき、伝統的な文化体系を抽出することに拘泥してられない」とか、文化人類学の成果も「なにか別世界の出来事のように傍観することに力を貸してきたのではないか」などというようにして、従来の文化人類学の成果を批判しているように見えます。

ちなみに、一般の読者には分からないと思いますから、敢えて申し上げますと、この論文の筆者であるE氏は自身が文化人類学者なのです。

ということは、この論文の冒頭で自分と同じ文化人類学を専攻する研究者の成果に対して、E氏が批判的な意見を持っている、と私には想定されます。

仮に、そのような推測が的はずれでないとしても、同じ専門家同士のあいだでは「批判的な議論をしない」という常識があるのではないかという私の想定が間違っていたこととなりますから、私にとってもE氏の指摘は見過ごすことができません。

しかし、アフリカ研究の意義は「伝統的な文化体系を抽出することにあるのではない」と批判的な表現を使っていますが、そのような研究を「なぜ、駄目だ」と考えるのか、E氏自身の考える理由や根拠は、少なくとも具体的には述べられていません。

このように、批判が具体的な根拠を伴っておらず、非常に抽象的であるため、第三者である私たち読者には、E氏の批判それ自体が納得できる理由や根拠にもとづいているのか否かを判断することができませんから、「そのように駄目な研究もあるのか」などと傍観するだけで、「E氏が挙げる根拠は、批判の根拠にはならないのではないか」などというように考えるなどして、自分も積極的に議論に参加しようという意欲がわかないのではないのでしょうか。

しかも、E氏は文化人類学の成果が「傍観することに力を貸してきた」と批判的な言葉を使いながら、自分自身も抽象的な言葉を無限定に（つまり、具体的な根拠を示さないまま）使うことによって、この論文の読者を傍観者の状態に立たせることに力を貸すという矛盾に陥っているのではないのでしょうか。

このように見てきますと、この論文の筆者であるE氏は、言葉には抽象性という特性があり、できるかぎり具体的に使わなければ、自分の意思が伝わらず誤解されることも起こりうる、ということに自覚するのに必要な経験が欠けてきたのではないか、というように想定されます。

それは、言い換えれば、言葉が不完全な道具であるという言語観がE氏には希薄であり、むしろ言葉は完璧な道具であるかのように見る考え方もっており、そのため、できるだけ具体的に表現して言葉の障害である抽象性を補う必要性を感じる事がなかった、と言えるのではないのでしょうか。

## (2) F氏の論文「アフリカの人たちとつきあい、その文化を描くということ」(本書, pp.157-168) から読み取る

ここで、F氏は「松田素二は、フィールドワークについていくつかの警句を発している [松田, 1991年]。それは、その社会のメンバーに『一時的』になったのではないか、『小規模で孤立したまとまり』としてその地をとらえていないか、観察者は価値自由な中立者であって客観視できるということを当然視していないか、通訳やコックや調査助手を権力関係のもとで利用していないか、といった諸点である。これらの点は、たいへん重要だ。いつも認識のうちに止めておかね

ばならない。みなそれぞれにこの悩みについて模索しているのだろう」(pp.157-158)として、松田素二氏の「警句」というものを紹介しています。

この紹介が論文の冒頭に置かれていることを見ても、これを紹介したF氏がこの「警句」を非常に重要視していることは想像できます。事実、この「警句」を紹介したすぐ後で、F氏は「これらの点は、たいへん重要だ」と述べて、自分も重要だと考えていることを示唆しています。

仮に、そのような私の理解で間違いなしとしますと、当然のことですが、この「警句」に込められた意味を理解したうえで、F氏は「この指摘は、重要だ」と判断したと考えるのが自然だと思います。言い換えれば、松田氏の指摘が重要だとF氏が判断したからこそ、わざわざ「警句」として広く一般の読者にも紹介しようと考えたのに違いない、と私には思われます。このように理解しても、曲解ではないとしますと、私には次のような疑問がでてくるのです。

その疑問というのは、自分が重要だと判断した理由や根拠を、どうして示していないのかということなのです。私たち誰でも、思い当たるところがあるのではないかと思います。私たちは自分が常識であり自明のことだと思うこと(たとえば、「太陽は東から出て西に沈む」ことなど)については、なぜ、「東から太陽が昇るのか?」などという疑問を感じることもなく、その理由を考える必要にせまられることもほとんどありませんから、それを言葉で説明することは不可能に近い、と思います。

そこで、これは私の単なる想像にすぎませんが、F氏の場合も、松田氏の指摘を重要だと言いながら、なぜ、それを重要な指摘だと判断したのか自分の理由を説明していないのは、それ(つまり、F氏自身が言う「警句」)は誰もが重要だと思っている常識のように自明のことだから、敢えて説明する必要はないなどと判断したためだったのではないのでしょうか。

なぜ、このような些細なことを問題にするのかと申しますと、私の想像が間違いないければ、この論文の筆者であるF氏の場合も、ガーナのコプリソ村で常識の理由を問われるまでの私と同じように、自分が常識だと思っていることについて、これまでに一度も、その根拠を公開の場で問われたことがなく、そのため答えに窮したという「苦い」経験がないのではないかと考えられるからです。その意味で、私とF氏は常識の根拠を問わない集団や社会に生きてきたのではないか、という推測が成り立つのです。

そこで、この推測が事実であるか否かを究明するためにも、先に進むことにしたいと思います。

この論文で筆者F氏は、次のような文章を書いています。すなわち「前者(岩田慶治『創造人類学』)」では、異文化との交流の諸段階を、次のように語る[岩田, 1982年]。まず第一段階は『とびこむ』であり、異文化との出会いを意味する。第二段階は『近づく』であり、村に入りこんで生活を観察し、そこにある生活の文法を理解して当地の文化を身につけていく。フィールドでは、多くの場合、私たちの意識はここまでで、その次のことは試みはしていても、強く意識してこなかったのではないか。そこで、その次の第三段階は『相手の立場に立つ』である。ここで、村人と調査者がその役割を交替しながら相互に社会的ドラマを演じたり観察したりしあう。そして、最後の段階として、分析や解釈の桎梏から脱して、『ともに自由になる』創造の地平をつくりだすのである」(p.159)と、述べています。

この文章を読んでいて、私が最も不思議に思ったのは、この論文の筆者F氏が「当地の文化を身につけていく」という言葉を至極、容易なことであるかのように使っている点です。この場合、「当地の文化」とは、言うまでもなく、私たち日本人にとって「異文化」とされるものですが、少なくとも私の経験から見れば、異文化を「身につける」などということは非常に困難であり、

なにより、何が「当地の文化」なのかを見極めること、それ自体が決して容易なことではないと考えられるからです。

たとえば、サハラ以南のアフリカ各地において伝承されてきた農法のひとつに「混作」(mixed-cropping)とか「間作」(inter-cropping)などと呼ばれる栽培法がありますが、この農法が自然に発生したものではなく、あくまでも人間によって考案されたものであるとしますと、この栽培法が熱帯アフリカの自然環境とそこに住んで農業を営む人々にとって最も理に適った「正しい」方法であったからこそ、現在に至るまで「その方法を続けるのが当然の常識である」かのようにして(つまり、改めて理由や根拠の是非を問う必要を感じないままに)人々のあいだに伝承されてきた、と考えることができます。そして、世界には混作とはまったく異なった「単作」(mono-cropping)という農法が存在することをあわせて考えますと分かるように、農法の違いはただ単に「混作」とか「単作」というような人間の目で見ることのできる栽培方式の違いだけでなく、人間の目では見ることのできない「ものの考え方」やその栽培方式を正しいと考えたり判断する場合、判断の基準となる価値観にも違いがあることを意味しているのではないのでしょうか。ここで、クラックホーンの言うように、「ものの考え方」とか価値観まで含めたものを文化であると規定しますと、異文化とは「ものの考え方」や価値観の違いを意味することになりますから、異文化を身につけるといことは価値観を逆転させることである、と言ってもよいことになります。

このように考えるなら(つまり、クラックホーンなどの文化に対する規定や定義を認めるなら)<sup>(註1)</sup>、この論文の筆者であるF氏が言うように「異文化を身につけること」が容易でないばかりか、たとえ身につけたいと願ったとしても、身につけるべき「ものの考え方」や価値観は人間の目で見えるものではなく、経験にもとづいて推測する以外に把握することのできないものですから、異文化を知ることそれ自身にも私たちは試行錯誤が必要になるのではないのでしょうか。

このように考えてきますと、どちらが正しいかは即断できないにしても、私とかクラックホーンなどとF氏のあいだには文化という用語に対する解釈や規定に大きな相違があり、何の注釈もつけずに抽象的な表現のまま「当地の文化(つまり、異文化)を身につけていく」などと言うのを見るかぎり、F氏の文化には「ものの考え方」とか価値観が含まれておらず、文化を衣服のように、人間の目で見ることができない「物」であるかのように考えているのではないかと私には推測できるのです。

しかし、問題は、文化という用語の解釈について私とF氏とのあいだに相違があるか否かということではなく、非常に抽象的な文化という言葉が無限定に使っていることがもがたっているとおり、F氏には、言葉の抽象性こそが意思の疎通をさまたげる障害なのだという自覚がなく、言葉を「完全無欠な道具」であるかのようにみる言語観があるのではないかと、と思われる点にあります。

その見方が的はずれでないとしても、この論文の筆者であるF氏の場合もまた、批判的な議論をすることによって、言葉の持つ抽象性という特性が意思の疎通を妨げることがあることを痛感したという「苦い」経験が欠けているのではないかと、と推測することができるのです。

### (3) G氏の論文「牧畜民の国家形成：フルベ族の聖戦」(本書, pp.169-183)から読み取る

この論文の筆者G氏は、冒頭で「人類文明の発展に牧畜民が果たした役割の重大さの認識が一般に欠けている」(p.169)としたうえで、「人類文明の飛躍的発展は、牧畜と農業の発明をメル

クマールとする新石器革命をまっけてはじめて可能となった。野生の動物を『家畜化』する牧畜と、野生の植物を『栽培植物化』する農業の発明とともに、人類はそれ以前の狩猟採集時代のように、自然の恵みをただ受け取るだけでなく、自然に直接働きかけ、自然を人間に好都合となるように改変し、自然の秩序を人間中心に再編し始めたからである。(略)しかし、このプロセスにおいて、牧畜という生業形式と、この生業に従う牧畜民がどんな役割を果たしたかについては、あまりはっきりとした認識はない。それどころか、牧畜、牧畜民の役割はむしろ軽視されがちであり、時に牧畜は農業の敵対イメージで理解されやすい。人間を『文化的存在』と見る考え方がなによりも、この軽視の表れである。西洋語で『文化』を意味するカルチャー(英)、キュルチュール(仏)、クルツール(独)のもともとの意味は、『耕作』だからである」(p.170)と述べています。

このように、筆者G氏は「牧畜民が人類文明の発展に果たした役割の重大さの認識が一般に欠けている」とか、彼らが果たした役割について「はっきりとした認識がない」などというように、この文章には批判的な表現が出ていますし、牧畜民の役割は「軽視されがちである」とも述べています。

この文章を読んで、私はG氏の批判的意見に賛成することも反対することもできず、それを傍観するほかありません。なぜなら、G氏は牧畜民の果たした役割の重大さを認識していないのは「誰なのか」とか、その役割を軽視してきたのは「誰で」あり、その結果として、どのような研究上の障害や欠陥が生じたのか、などといった点を具体的に示していないからです。そのうえ、この論文の筆者であるG氏自身が「認識が欠けている」とか「はっきりとした認識がない」あるいは「軽視されている」などと判断したのであれば、当然、G氏には具体的な判断の根拠や論拠がなければなりません。しかし、G氏は、その根拠や論拠も具体的に示してはいないのです。

このように、G氏は批判的な意見を述べながら、少なくとも私が読んだかぎりでは、批判の対象(誰の論文や発言をとりあげているのか)と批判の根拠(どのような理由で批判的な結論に達したのか)のいずれについても、明記していません。

この事実は、いったい何を意味しているのでしょうか。

私が推測するところでは、G氏のように具体的な根拠や論拠を示さないで批判するというのは、G氏が具体的な根拠の提示を求められるような「議論をした」という経験を欠いていることを意味しているのではないかと、思われるのです。

言い換えれば、G氏は、具体的な根拠を示さないで批判したり、自説を展開しても、それが許される集団や社会に生きてきたため、根拠や論拠を示す必要に迫られることがなかったのではないかと、ということです。

これらの事実を見るかぎり、G氏のこの論文は、批判の当事者であるはずの「対象」と「主体」の双方が、いずれも存在しない実に奇妙な研究論文になっているのではないかと、考えざるを得ないのです。

しかし、私たちは、このような論文をG氏ほどの学識や多彩な知識を備えた研究者が意識して書いたなどと考えることはできません。

なぜなら、たとえG氏と言えども、何の根拠や論拠もなく「欠けている」とか「認識がない」などと判断することはできないのですから、G氏にも何らかの根拠があったと想定するのが自然だからです。問題は、G氏が所属する日本アフリカ学会の学術大会といった「公開の場」において、その根拠や論拠を具体的に示す必要に迫られる(つまり、具体的な論拠を問われる)「激しい議論」をしたという経験に欠けているため、論拠を明示する必要性を自覚していなかった、と

言えるのではないでしょうか。

#### (4) H氏の論文「歴史のなかの民族誌：ナイル上流地域と外部勢力」(本書, pp.184-197) から読み取る

この論文の第1節において、筆者H氏は「アフリカの他地域と比べてみても、南部スーダンが外部勢力の直接的な影響や支配を受けた期間は短い。しかし、その短期間のあいだにも、各民族集団は相当の変化を経験したと考えるほうが自然であろう。調査研究の過程で、私はだんだんと、民族誌にとってこうした歴史がもつ意味について考えるようになった。言い換えれば、対象とする民族集団の現在をよりよく理解するうえで、歴史の果たす役割に関心を抱くようになった。この小論は、こうした問題意識を展開し、この地域の『歴史民族誌』的研究の第一歩をめざしたものである。そのさい焦点となるのは、ナイル上流地域の諸民族集団とさまざまな外部勢力との関係である」(p.186)として、この論文では「こうした問題意識を展開する」ことが目的のひとつであるかのように述べています。しかし、「こうした」問題意識と言われても、少なくとも第1節を通読するかぎり、私の乏しい理解力では、何を問題にしているのかH氏の問題意識、つまり、この論文の目的または主旨を明確には把握することができないのです。

そこで、第2節などを読めば問題意識が理解できるのではないかと考えて、先に進むことになりましたところ、次のような文章が出てきました。

すなわち、「独立後のスーダンや帝政と社会主義体制をへたエチオピアにおいては、ナイル上流部の民族集団は国家の体制のなかで、政治経済的にも文化的にも『周辺化』された存在になった。周辺化は、外部勢力との接触がはじまった段階から進行していたと考えられるが、その制度化が完成したのは現代の国家の枠組みのなかにおいてであろう。この状況下では、周辺化された民族集団が国家のコントロールする資源(たとえば教育と就職の機会、医療、そして外国からの援助など)にアプローチする機会は、きわめて限られている」(p.195)という文章です。

ここで筆者H氏は「国家のコントロールする資源」として、「教育」をはじめ「就職の機会」や「医療」、さらには「外国からの援助」などを挙げているのですが、ここで言う国家の「コントロール」とは具体的に何を意味しているのか、私には理解が難しいと思われました。

そこで、この言葉を仮に「支配、管理、あるいは統制する」という意味に解釈しても、それほど大きな間違いではないとしますと、この文章の筆者であるH氏には「教育は国家が統制したり管理しているものだ」という教育や国家に対する見方とか考え方があり、その考えを常識だとH氏が考えているのではないかと私には推測することができるのです。なぜ、そのように言えるのか言えば、既に述べたことですが、私たちは常識の根拠が何かを知らないまま、「そのように行動したり、そのように考える」のが当然のことであるかのようにして、つまり、常識の前提となっている根拠や理由が何であるかを考えることもなく、文字どおり無意識のうちに常識を身につけますから、第三者からその根拠や理由が何であるかを尋ねられなければ、自分の常識に根拠や理由があることさえ知らないのです。

そのように考えることができるなら、H氏が、何も根拠や理由を示さないまま、「教育は国家が統制したり管理しているもの」であるかのように、断定的に表現していることは、この考え方こそ、H氏が常識だと思い込んでいる教育や国家に対する考え方であり見方(つまり、H氏自身の教育観であり国家観)であることの証左である、と言えるのではないのでしょうか。

それでは、「教育は国家が統制したり管理しているものだ」というようなH氏の常識は私たち

のすべてが納得することのできる普遍性をもった正真正銘の常識だと言えるのでしょうか。

この疑問について、私の結論を述べるとしますと、少なくとも私には、H氏の考えに不十分なところがあり、残念ながら常識とは言い難いのではないかと、思われます。

なぜなら、たとえば、子供に農作業や家事を「手伝わせる」ことも、さまざまな試行錯誤を経験しながら、子供に自分自身の未熟さを実感させる「人間教育」のひとつであると考えれば、これが国家の統制や管理にもとづいておこなわれる教育でないことは明白ですから、これだけでも「教育は国家が統制、管理している」というH氏の常識と思いついておこなっている考えが狭い教育観にもとづいたものであることが明らかなのではないでしょうか。

これと同じことが「医療」についても言えるのではないかと、思います。

すなわち、先に引用した文章を読めば明らかのように、H氏は「医療も国家が統制したり管理している」かのように述べていますが、アフリカにかぎらず、世界各地には国家が認定した医師の免許や資格を持たない（つまり、国家の管理や統制を受けない）「呪術師」とか「伝統医」などと呼ばれる人物が「民間療法」をおこなってきたことが知られていますから、この「民間療法」もまた、ひとつの医療であるとすれば、この場合も世界には「国家の管理や統制が及ばない医療」が存在することを認めなければなりません。その意味においても、H氏が使う「医療」という言葉は、「国家が認定した」医療と言うように、限定して使ったり、受け取らなければ、大きな誤解を招く原因とも言うべき抽象性がある、と言ってもよいのではないのでしょうか。

つまり、この論文の筆者であるH氏の場合もまた、言葉には抽象性という道具としての限界があることを知らず、それを意識したり自覚させられた経験がないため、「言葉は不完全な道具である」という言語観が欠けているのではないかと、私には推測することができるのです。

#### (5) I氏の論文「アフリカ女性研究の現在：地域研究からのアプローチ」(本書、pp.224-237)から読み取る

この論文のなかで、筆者I氏は「わが国におけるアフリカ女性の研究はおそろしく立ち遅れているといわざるをえない。その中で、文化人類学の分野での業績はあるが、それも一部を除けば、調査ごぼればなし的なエッセイの域をでない。社会科学の分野では、寡聞にして数編の論文を知るのみである」(p.231)と述べています。

このように、筆者であるI氏は、アフリカ女性に関する研究がわが国では「おそろしく立ち遅れている」と指摘しているのですが、I氏の言う「研究の立ち遅れ」とは、研究の「内容」が諸外国の研究と比較してみても著しく低い、という意味なのか、それともただ単にアフリカ女性に関する研究論文や研究者の「数」が諸外国に比べて著しく少ない、ということの意味しているのか明確ではありません。

そこで、この論文の読者である私たちは、筆者I氏が「研究の立ち遅れ」と指摘している言葉に込められた意味を、推測しながら、理解する以外にありません。

そこで、仮に、諸外国の研究と比較して、わが国におけるアフリカ女性研究の内容が「粗末である」とか「そのレベルが低い」という意味であるとし、当然のことながら、この文章の筆者であるI氏自身が自分の基準にもとづいて、「粗末」とか「低い」と判断したと推測することができます。

そのように考えることができるとしますと、この文章の筆者であるI氏は、自分自身の判断基準にもとづいて「わが国におけるアフリカ女性の研究はおそろしく立ち遅れている」と判断した

ことになりますが、不思議なことに、I氏は、自分の判断基準（つまり、なぜ、立ち遅れていると判断できるのかという、その理由）をほとんど何も示してはいないのです。

ここで私は、I氏が自分の判断基準を示さないのは「不思議だ」と言いましたが、それは、次のような理由によるのです。

私たち研究者は、自分の研究成果が「粗末である」とか「レベルが低い」あるいは「おそろしく立ち遅れている」などと自身で承知していながら、それを論文や著書などとして公表しているのではなく、少なくとも、自分では「公表する価値がある」と考えるからこそ、公表したり発表していると言ってよいでしょう。それは、自分では「粗末だ」とか「レベルが低い」などと事前に判断していないことを意味している、と言うこともできるでしょう。

このように考えますと、公表した自分の研究成果に対して「粗末だ」などという批判が出されれば、当の研究者は、絶対の自信がなければ、自分の成果を批判した人物が「粗末だ」と判断した理由や根拠を具体的に知ろうとして、その理由や根拠が何なのかを批判者に「問いたです」か、自分でも批判者の批判文や言葉のなかから、具体的な根拠を探し出そうとするのではないのでしょうか。この結果、批判する者はもちろん、批判される者も、具体的な根拠を公開しなければ、批判そのものが無意味になる、ということ意識せざるを得なくなるのではないのでしょうか。

このように考えても間違いではないとしますと、この論文の筆者であるI氏が、自分の根拠や理由を具体的に明示しないまま、日本におけるアフリカ女性に関する研究の成果を批判しているように見えるのは、I氏が、具体的な根拠を明示しなければ意味のある批判ができないことを知らないためではないか、と私には推測することができるのです。

言い換えれば、I氏には、(日本アフリカ学会の場合は)「学術大会」というような公開の場で、「この研究成果を取りあげる」などというように、アフリカ研究の具体的な成果に的を絞って(つまり、私が本稿で実際におこなってきたように)、批判するとか批判されるなどという「苦い」経験が欠けているのではないか、と私には考えられるのです。

それが事実であることは、筆者I氏が批判の対象である女性研究の成果を具体的に明示していないことから、容易に推測することができるでしょう。

(注1)「電磁界は目に見えないが、目に見える出来事の中には電磁界の存在を想定することによって、手際よく抽象的に説明できるものがある。同じように、文化もそういうものとして目で見えるわけにはいかない。目に映るのは、共通の伝統を固守してきた人間集団の行動と人工物にうかがわれる規則性である。(略)ある考え方、感じ方、それが文化である」(C.クラックホーン、前掲書、p.28)

## むすびにかえて

本稿では、アフリカ研究の成果のひとつである「本書」(赤阪賢・日野舜也・宮本正興編『アフリカ研究：人・ことば・文化』)に収録されている数本の論文を対象に選んで、それぞれの論文の筆者である日本のアフリカ研究者が何を「暗黙の前提」として身につけているのかを、読み取ることにより、アフリカ研究者のあいだに共有されている常識としての「ものの考え方」とか価値判断の基準などを明らかにするようこころみてきました。

このように「暗黙の前提」を読み取るためには、言うまでもなく、推測とか想像という間違いや錯覚を犯しやすい危険な方法に頼らなければなりません。したがって、私が無意識のうちに、

重大な誤解や錯誤などを犯している可能性がある、といわなければなりません。

そこで、これまでの検討結果を以下のようにまとめ、読者諸賢からの厳しい批判をまちたいと思います。

### (1) 検討した論文の筆者に見られる共通点

それは、既存のアフリカ研究の成果に対する「批判的」な見解を提示している、というひとつの共通点があります。また、それらの「批判的」見解のあいだには、次のような共通した特徴があります。

- ①批判の対象となっている論文や著書と、その筆者または著者などが具体的には示されていない。
- ②論文の筆者は、批判的な意見を述べているにもかかわらず、批判の根拠や論拠は、具体的に示していない。

### (2) これらの共通点から推測される「暗黙の前提」

これは、すでに本文においても指摘したことですが、これまでに取りあげた論文の筆者たちが自分自身の批判的な意見や見解を、批判の対象や批判の論拠を示すことなく、いわば抽象的な言葉によって表明していることは、抽象的な表現であっても誤解や錯誤を与えることなく、自分の意見や見解を読者に伝えることができるなどというように、言葉の抽象性が誤解や錯誤をもたらす障害だ、という言葉に関する見方（つまり、「言葉ほど不完全な道具はない」という言語観）が欠けており、逆に、言葉は完全無欠な道具であるかのように見る言語観が前提になっているのではないかと私には推測することができるのです。

このような推測が間違いでないとするれば、これらのアフリカ研究者は、言葉には多様な解釈をすることのできる余地があり、その余地こそ言葉の抽象性であり、それが誤解や錯誤の原因であるということを知らず、それに無意識だと推測できるのではないのでしょうか。

そのような見方ができるとしますと、少なくとも、本稿で検討の対象となった日本のアフリカ研究者のあいだには、言葉は完全無欠な道具であるなどと考える言語観を無意識のうちに身につけ、そのような言語観が「暗黙の前提」として、その言動を支配してきたのではないのでしょうか。

このような言語観が常識であるかのように共有されてきたため、学術大会のような公開の場で、アフリカ研究の大前提ともいべき研究目的をめぐって相互批判的な激しい議論がおこなわれてこなかったとすれば、私は、日本アフリカ学会を「学会」と呼ぶことにためらいを感じざるを得ないのです。

小論が旧弊を破る契機になることをねがって、筆を置くことにしたいと思います。

### 引用文献リスト

1. 中野好夫『酸っぱい葡萄』みすず書房、1979年
2. 泉 靖一『文化のなかの人間』文芸春秋、1970年
3. クライド・クラックホーン／光延明洋訳『人間のための鏡』サイマル出版、1971年
4. ジョン・コンドン／近藤千恵訳『異文化間コミュニケーション：カルチャー・ギャップの理解』サイマル出版、1980年
5. エドワード・T・ホール／国弘正雄・長井善美・斎藤美津子訳『沈黙のことはば：文化・行動・思考』南雲堂、1989年